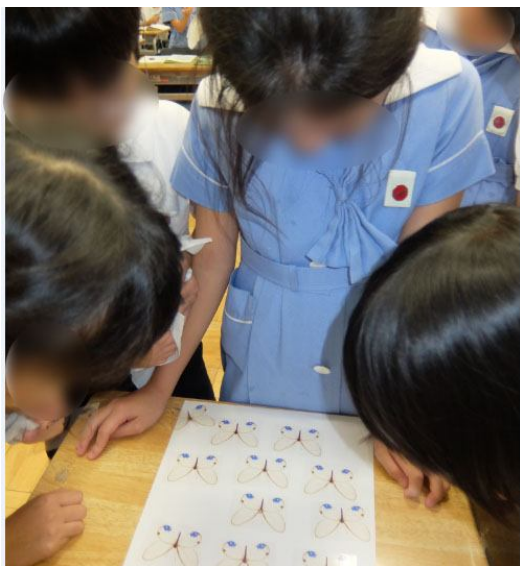


「世界一美しい昆虫(2)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

(4) 「型フィルム」を選んで作る

子どもというのは、機械的に配布するよりも、「選ぶ」という段階があったほうが、その後の作業が意欲的になるものである。配る「スカシジャンメの型フィルム」はどれも全く同じなのだが、たくさん並べておいて、好きなものを選ばせることにした。



子どもたちは、並べてある型を真剣に見ながら、時間をかけて選んでいる。選んだ型は、指紋をつけないように慎重に、自分の机まで運び、話し声一つなく、真剣に作業を始める姿が見られた。



(5) 「切り抜く」という営み

子どもは、はさみを使った作業が好きである。私は、切り取り作業の実演をしながら、「正確に切り抜くことによって、本物のチョウにより近い模型ができる」

ということを、繰り返し説明しておいた。その功あつ子どもたちは、小さな型を一生懸命に切り抜いていた。



今回の型は透明で、しかもチョウの体は左右対称なので、表裏はない。子どもが切りやすい面から切れるところが面白い。「切り抜く」という営みは、そのまま「よく観察する」ということにつながる。翅の形状、胴との接合、触角の位置や太さなどを、否応なしに観察することになる。

(6) 最も切り抜きが難しい「触角」

スカシジャンメの型の切り抜きで、最も難しかったのが「触角」である。太さは0.2mmほどしかない。私は無理に触角だけを残さず、少し離れた外周を切るようにアドバイスしておいた。しかし、子どもたちの「挑戦心」はすばらしい。たとえばこの作品、見事に太さ0.2mmの触角だけを切り残している。ほとんど本物のように見える。子どもは近くのものを見る視力が良いが、それにしても、子ども用の普通のはさみで、これだけ切り残した集中力に、全く脱帽だった。

